

# I 生徒が主体的に学習できる

## 地理を考える視点

加 藤 佳 孝

### はじめに

社会科の中で地理がどのように学習されるべきかについて、本校ではこれまで2つの面から検討を加えてきた。即ち1つは、社会科全体の教科構造の検討の中で地理がどのように位置づけられるべきかであり、1つは生徒が主体的に学習できる地理、それは系統地理的学習と地誌的学習の両面をもつ新しい地理の学習体系の追求という形での実践的研究であった。その中で社会の目標を社会認識という形でとらえ、歴史・政経など他科目との関連性を持たせた地理としては、これまでの系統地理では不十分ではないか、むしろ地誌的が学習望ましい体系ではないかとも考えられるが、地理の目標を「自然と人間の対応関係を因果関係として正しく把握させる」、「世界の社会・経済の地域的特色は、地理的背景が基盤にある」ことを認識させるとすれば、そこには当然新しい学習体系の地理が必要になってくると考えた。45年版の指導要領は、系統地理的学習の地理A、地誌的学習の地理Bと2つの学習体系を打出したがこれは本校の求めるもとは必ずしも一致したものではなかった。本校では46年度に地理A、47年度に地理Bの体系で学習計画を組み実践してみた。

これを手がかりに、生徒が主体的に学習できる地理を考える視点について若干の考察を試みたい。

### 1. 新しい学習体系の地理を考える視点

35年版指導要領にもとづく系統地理が無味乾燥なものであるという批判はともかくとして、実際に生徒が地理学史・地図・自然環境……と学習を展開する時、学習項目が多すぎるためか、教師は黙々と地理を教え生徒は黙々と地理を覚えるという傾向に陥りがちである。もちろん教師は各項目を地理の全分野での位置づけの中で解き、生徒は各項目の学習が大局的に何を意味するのかを把握するよう努力するのだが、実際的には羅列的学習に終わっているのが実情であった。

社会科の中で地理を考える時、重要なことはあくまでも社会科全体のねらいを前提に、地理で社会科を教える、即ち、社会の諸々の現象・事象を歴史的・政治経済的視点を押えさせながら地理的視点から視させ考えさせるという基本的姿勢を崩してはならないことである。このような姿勢をもつならば特に世界史や政治経

済とかかわりあう学習内容を盛りこめるし、生徒に興味を持たせるのではないか。そしてこのような視点から考えられた学習体系に沿う学習が積み上げられるならば、地理は社会科の中で「社会認識」という目標に近づく重要な分野として位置づけられるだろうし、欠くことのできない見方・考え方を社会科に提供することは確かである。

このような基本的姿勢の上に、地理の大目標を前述のように①自然と人間の対応関係の認識②世界の各地域の社会的・経済的現象は地理的背景が基盤にあることの認識とするならば、地理の学習内容はどのように体系づけられるべきであろうか。このことを考える1視点として、45年版資料要領における地理A・Bの定義づけや改訂の趣旨を考察するのも有効な手段である。

### 2. 45年版指導要領における地理A・B

1960年代の日本は経済の高度成長に伴ない社会経済条件が大きく変貌した。こうした状況の中で中教審路線が打出され、路線に沿うかのごとく学習指導要領の改訂が行なわれた。社会科は複雑に高度化する社会を対象とするかぎり教材の増加は当然であるにもかかわらず、改訂版では履習単位は減少し、さらに選択制が導入された。こうした中で地理のみA・Bの区分が残ったが、従来のA・Bとは異なる系統地理、地誌中心のA・Bになったことは衆知である。改訂版指導要領によると「地理Aは、急速に発展する現代社会の動向にかんがみ改訂前の地理Aを系統地理的学習を中心とし、主題的探究を加味したものに改め、内容構成については、改訂前の地理が羅列的であるという批判があったことから、4つの大項目にまとめ科目として構造や基本的流れを明らかにした」としている。また「地理Bは、現代社会の動向にかんがみ、改訂前の地理Bを根本的に改め、世界の地域的学習を中心とするものにした」としている。そしてその論拠を、地理学の体系に関する課題として系統地理的理解と地域的理解とをどのように秩序だてて拡充深化させたらよいかということや、静的な地誌に対して動的な地域地理が提唱されているなどの点をあげている。

改訂の趣旨や論拠はそれなりに地理教育の問題点を正しく指摘しているものとして我々は十分深く考えてみるべきであり、それがあべき地理の学習体系や学

習内容を見いだす糸口になるものと考えられる。

### 3. 本校における地理の 学習内容と学習計画

本校では前述の問題意識を持ちながら望ましい地理の学習計画を求め、昭和46・47年度に次のような学習計画を立案実施してみた。両年度の学習計画は、改訂指導要領を念頭においたものである。

46年度の地理（4単位）	47年度の地理（3単位）
1. 生活と地理 ①人口分布と人類の諸集団 ②世界の自然 ③集落の地理 ④地図とその利用 2. 資源と産業 ①経済立地 ②世界の農牧業 ③世界の林・水産業 ④世界の鉱工業 3. 国土開発 ①日本の国土開発 ②世界の国土開発 4. 世界の結合と日本 ①世界の交通・貿易 ②国家と国家群の形成	1. 地表と人類 ①人類とその諸集団 ②自然環境 ③居住圏の拡大 ・地図の発達と居住圏の拡大 ・集落の地理 ④資源と産業の分布 ⑤地域と地域区分 2. 世界の諸地域 3. 世界の結合 ①交通・貿易による結合 ②国家と国家群の形成 （この他に生産の地理を系統的に1単位分学習）

両年度の学習計画の社会科全体での位置づけや細部については、本校紀要第16・17集に掲載してある。

いずれにしても、生徒が地理を効果的に学習するという点については学習計画が、生徒が主体的に学習するという点については学習形態が大きな要素ではないかと考えられる。生徒の主体的学習とは、理想的には地理に対して前述のねらいを理解した上で、個々の地理的事象現象が、生徒の内面において積極的に追跡され、深められるような積極的な学習をさすものとするれば、つまりそれはどのようにしたら地理に対する興味を持たせうるかということになる。

地誌的学習3単位、系統地理的学習1単位を併行させて学習した47年度に行なった小アンケートによって生徒の興味という点についてみると

- ・系統地理的学習に興味を持つ者 27%
- ・地誌的学習に興味を持つ者 73%

となり、教材配列においては地誌的学習中心の方が生

徒に興味を持たせうることがわかる。

また、主体的学習をという点については、両年度とも1部小グループを編成し、研究発表形式の学習（細部については、本校紀要第16・17集に掲載）を試みたが、この形式の長所を認めながらも、約80%の生徒（上記アンケート）が研究発表形式の学習よりは、教師中心の一斉授業の方が良いという反応を示している。中には、「現在の教師による押しつけの授業よりは、教育本来の自主的学習をとりもどそうとする…」という立派な意見を持ちつつも、一斉授業の方が楽だとする生徒もおり、教師の取組みの問題とは別に、生徒の学習全般に対する取組みの姿勢に問題も存在している。

ともあれ、生徒が地理を効果的に、主体的に学習できる学習内容と計画・学習形態を求め続けねばならないし、こうした問題意識を絶えず失なわないようにしなければならない。

### 4. 生徒が主体的に学習できる 地理を考える視点

地理の学習に生徒が興味を持ち、それなりに目的意識を感じさせながら学習させるためには、学習内容・学習計画・学習方法など多方面から考えねばならないが、その際の視点として第1に地理が社会科全体の中で位置づけられ、とらえられなければならないことがあげられる。それは地理のねらいについてみるならば地理学の目標の如く、地域性の究明とか地域空間の配列構造云々というのではなく、社会科の枠の中で、他科目との関連性の中でとらえるべきであるということである。即ち、社会科のねらいを社会認識という点におけば、地理は社会を地域という語におきかえて、地域の政治的・経済的・社会的現象は地理的背景を基盤としているという考え方を地理のねらいとしたいということである。もちろんそれは、地理本来のねらいである自然と人間の対応関係を因果関係として正しく認識させた上でのことである。

第2の視点は第1の視点をふまえた上で、生徒が主体的に学習できる地理の学習内容や学習計画の検討は社会科の他の科目、特に世界史や政治経済との関連の中で行なわなければならないことである。

こうした視点を明確にしつつ、地理のねらいとその実践の方法論的裏付けを確立させるということが、改訂指導要領による地理A・Bの実施される時期において、我々地理担当者に与えられた課題であると考えられる。このような問題意識を抱きつつ、48年度は地誌的学習を中心として、上記2視点をとうしてより具体的な地理の学習内容・学習計画・学習形態ど的な検討を続けてみたい。